藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

老いても輝いて
～佐藤初女に学ぶ～

今年80歳になった。いつ死んでもおかしくない年齢になったが、平均寿命からみると、決して老人ではない。

世界でも上位の高齢者国にあって、日本の男性の平均寿命は81・25歳。女性は87・32歳であるのだから、80歳になったからといって老人とはいえない。

そんな中で、私が尊敬した人は佐藤初女さんである。東北の「マザー・テレサ」と呼ばれた彼女は96歳まで現役として活動し、2016年に帰天された。

私が彼女の存在を知ったのは、妻が買い求めた「おむすびの祈り」からである。悩み、迷い、救いを求めて訪れた人に、おむすびを供し、自殺まで思い止どまらせた人もいるという。

彼女を思い出したのは「蕗のとう」である。前々回、我家の家の前の土手に沢山出て来た。

初女さんは雪深い東北の雪のしたから芽を出した蕗のとうで蕗味噌をつくり、それをおむすびにまぶして訪れる人に食べさせた。

ただ自分や友人だけで天ぷらにして食べて終わりではなく、おむすびにまぶしたものが人の命にもかかわったということに感銘をおぼえた。

我々はごく当たり前のように食事をするが、佐藤初女さんにとって「食はいのち」であり、95歳まで迷える人のために「森のイスキア」という集会所で人々のために生き続けた。

何と凄い老いの生き方ではないか。人はたとえむすびといえども心から持てなすことにより生きる大切さを実感させる。

80歳を過ぎ、老いた自分に若い時代のようなスピードある生活は出来ない。また、他人に迷惑をかけないように車の運転を止めた。

私の友人にテレビもラジオも利用しない生活を生き生きと生きている友がいる。これも高齢者の一つの生き方である。

私には初女さんのように大規模なスケールで人を救う、人と共に歩むことは資金的にも出来ない。

しかし、子ども部屋だった部屋もあり、夫婦2人で紅茶でも供しながら他人との連帯の場づくりをしよう。これは80歳を過ぎた私にも出来る。

また、東京の長女から初女さんの別の本が送られてきた。「いのちをむすぶ」。

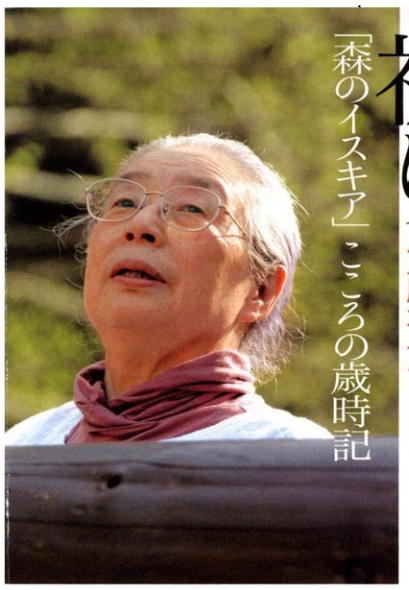
東北のマザー・テレサと言われた佐藤初女さんはおむすびで人の命を結んだ。

彼女は言う「私は面倒くさいという言葉が一番いやだ」と。誰でもある線まではやれる。そこから一線を越えるか、越えないかが、人の心に響いたり、響かなかったりするのだ。

私は簡単に「面倒くさい」と言ってきたが、これからの人生ではこれを禁句としてゆっくりと生きて生きたい。初女さんは「自分がいまいるこの場所で命尽きるまで生きていく」と。

家の前の土手の「蕗のとう」が私と初女さんを一つにしてくれた。考えてみればおむすび一つ、蕗のとうの天ぷらで人と人を近づけてくれるのだ。

何か大きな誰にも大切なものをもとめるのではなく、今あるこの自分の生活の中から人とのかかわりを大切に生きようと思う。蕗のとうに感謝しながら…。



第1作の「おむすびの祈り」

第2作「いのちをむすぶ」

蕗のとうでも人を結ぶ